



## 第 71 号

発行

小松同窓会本部

〒923-8646

小松市丸内町二ノ丸15

石川県立小松高等学校内

天守台編集委員会

TEL (0761) 21-6330

小松高校卒業後60年を迎える十八回同窓会が昨年11月に開催され、104名もの驚くほど多くの仲間が集いました。天守台を散策し、梯川でのナックルフォアを楽しんだ青春や熱心に教育してくれた多くの先生方のことを懐かしく思い返しました。

私は経済学者として歩んできましたが、高校卒業以来、沢山のことに巡り会ってきました。小松を離れて入学した東京大学では、最初の2年間は駒場の教養学部で学ぶリベラル・アーツの世界でした。そうそうたる学者の講義は魅力溢れるものでしたが、幅が広く、どこから手も付けたら良いものか模索する日々でした。猫に小

師事するという幸運に巡り会えたことはとても嬉しいことでした。その時に教わった国際経済学は私の専門領域となりました。

学部卒業後、大学院に進学することも考えましたが、先輩達が紛争の爪痕が残る東大から欧米大学院に留学するのを見て、それならと、霞ヶ関の通商産業省に入ることにしました。キャリア官僚には海外大学院への留学の道が開かれており、先生から「中央官庁から留学する手もあるよ」との示唆があったことや日本経済を舵取る通産省での仕事に携わってみたい気持ちがあつたことが影響しました。当時

## 国際経済研究への歩み

新潟県立大学理事長・学長  
京都大学名誉教授

若杉 隆平 (高18回)



小松高校図書館への寄贈書籍

経つと大学運営の要職が回ってきます。横浜国立大学では経済学部長・副学長を5年務めました。国立大学が法人化する時期であり、その最前線を担いました。大事な仕事でしたがそろそろ研究現場に戻りたかったので、慶應義塾大学からの招きを機に、慶應に移籍し、三田の活気溢れる中で教育研究を続けました。その後京都大学経済研究所から招きを受けました。定年まで長くありませんでしたが、近代経済学のメッ

力の京大経研に思い切つて移り、新たな環境の中で教育研究を続けました。

30年間で4大学を経験しましたが、大学が変わっても国際経済を実証分析する私の研究は変わりません。むしろ様々な研究仲間と巡り会うことで新しい思考と発見を生む原動力

を得たように思います。国際学術誌に論文を発表し、書籍を出版し、国際学会で報告し、学会からの表彰も受けました。加えて私の研究室から国際経済学者が何人も育ったことはとても嬉しいことです。一人の研究者の育成は1000本の論文にまさると言われます。

研究者に定年はありませんので研究は続けてきましたが、そんな時、新潟県立大学から突然の招きがありました。大学院での講義だけでなく、引き受けたところ、思わぬことに理事長・学長に選任され、今年で10年を迎えました。国立大学学長としては異例の長期にわたる重責を担うことになりましたが、大学運営にこれまでの蓄積を生かすことも貢献の在り方と思っています。

最後に、50年にわたり私の学者生活を支えてくれた妻春枝は同じ十八回です。また我々の結婚に本陣良平先生(小松中学36回・元金沢大学学長・久子御奥様(小松高女32回)がお仲人をして下さいました。小松高校が私の中にしっかりと根付いています。

判のようで、教養教育の恵まれた機会を生かし切れなかったことを残念に思う時があります。

大学時代を過ごした昭和40年代は高度経済成長期の真っ只中にあり、経済メカニズムを分析する学問に関心が向かわないはずがありません。ただ、大学で経済学を学ぶことを期待していた時期に予期せぬことが起きました。東大紛争です。ストライキで授業はなく、大学は荒廃し、入試も見送り、一年半にわたり機能が停止しました。本郷に進学するのが一年近く遅れましたが、経済学部では近代経済学者として世界に名を馳せる根岸隆先生(当時助教授、現東京大学名誉教授・文化功労者・文化勲章受章)に

としては大変珍しく、学者と行政官の二足の草鞋を履くことになりました。そして行政官として仕事をするうちに留学の機会が訪れ、イェール大学経済大学院への入学が決まりました。世界の俊秀と共に寝食を忘れて研究した米国での2年間は、研究者としての基礎を固め、博士論文に繋がる貴重なものでした。

学者としての教育研究は信州大学経済学部に赴任した時から始まりました。その後、横浜国立大学から招かれ、国際経済学の教授として十数年、横浜で充実した研究生活を続けました。ところで大学には教育研究だけでなく大学運営の仕事があり、教授ポストに座って何年か

## 新著

『上』vs『下』の経済学から  
生徒会活動を思い出す

立命館大学教授 経済学者

松尾 匡(高35回)



高校時代、生徒会活動の中で人生の早いうちから挫折と立ち直りを経験したのは、悪いことではなかったと思う。もともと頭でっかちに理屈を膨らませて大口をたたくりには、不器用で気弱でもできない卑小さが我が正体である。砂上の理想を何一つ実現できずに生徒会の役を辞めたとき、そんな現実の自分を初めて直視させられて人生のメンタル史が暗転した。歳をとった今となつては、不器用も気弱も個性のうちだと馴れ合い、大口たたきも低姿勢で誤魔化して開き直っている。しかしそんなことは十七の小僧に想像すべくもない境地である。

それでも心掛けを変えるぐらいはできたふうなのは褒めてやろう。それまでは我ながら「上から目線」の本当にイヤな奴だった。紙上の権限を身に集め、頭で勝手に構想したことを小手先の陰謀で、形だけの民主的手続きで通せば

物事を動かせると思っていた。「失脚」し、それでは何事も進まないと思い知ってから、誠実にオープンに人と世論と向き合うよう心掛けを変えていった。そうすると、だんだんと道は開いていったように思う。

さて、私の知っている昭和の石川県は、「保守的」と言われていたが、保守系の政治家は町内や業界の青年団でひとの世話を焼いて叩き上げ、革新系の政治家は労働組合の書記などでひとの世話を焼いて叩き上げて、地方議員からのし上がっていった。だから常に顔のある支持者の暮らしに気を遣って、そのニーズを汲み取って選ばれてきた。しかしいつしかそんな姿勢が汚いもののように言われだし、ひとの世話を焼いたことなどない若者が、具体的な人の顔など思い浮かべる余地のない頭を想念でパンパンにして、人の暮らしの利害から切れた天下国家論を空中で戦わせることが美しい政治のあり方だというような風潮が支配的になってしまった。十七の小僧の反省とは逆向きの「反省」だったわけだ。そんな中で、30年に及ぶ不況の膨大な犠牲者の暮らしが置き去りにされてしまった。

この春、地平社さんから上梓した拙著『上』vs『下』の経済学は、単なる経済政策の提唱本にとどまるものではない。競争シバキ論であれリベラルであれ、地べたの大衆利害を離れた理念押し付けが罷り通っていたことが、現在の世論のフラストレーションの要因なのだと分析している。今再び、一人一人の具体的な暮らしの利害に根差すことを、汚くない当然のこととみなすよう、システムの再構築を呼びかけているのである。

那谷寺の歴史と  
文化・信仰の継承

那谷寺住職

木崎 馨雄(高42回)



那谷寺は717年、白山を開いた泰澄によって創建されました。平安時代には北陸を臨幸していた花山法皇によつて中興。中世には白山信仰の拠点として、その名を轟かせたものの、戦国時代に一山焼失。現在の伽藍は寛永年間(1642年前後)に、加賀藩三代前田利常によつて再興されたものです。現在の那谷寺は、当時いくつかの子院をまとめる本坊的な役割を担った那谷寺不動院の系譜を引き継いでいます。私は当山不動院の十七世ということになります。那谷寺では本堂、三重塔、護摩堂、鐘樓、書院が重要文化財に、庫裏庭園、おくのほそ道風景地が名勝に指定されています。本堂は懸造の拝殿から聖と俗の境界である唐門をくぐり洞窟の中に参拝する独特の構造です。この窟屋(いわや)洞窟は那谷寺において重要な意味を持つことから、内部に厨子が設えられ、泰澄ゆかりとされる秘仏十一面千手観音が安置されています。

す。洞窟内の厨子の周囲を歩くことによつて諸々の罪・穢れを払う胎内くぐり(古くはウレキヨマルと呼ばれた儀式)が行われてきました。この本堂は彫刻や建築意匠、建築材の由来など同時期に類例が見当たらず、現在、小松市と協同して設置した那谷寺文化財専門調査会による調査が進められており、那谷寺の再評価を目指しています。

同時に那谷寺はこれらの保存維持の危機に直面しています。本殿三棟においては、欄間の崩壊、厨子周り構造物の虫食いと腐食、カビ害の発生により傷みが急速に進み、躯体の自立そのものに影響が出ています。大きな要因に気候変動による岩窟内の高湿度化が想定されており、現在専門機関において調査が継続されています。また、護摩堂、鐘樓、書院においてはクマバチ等による虫害が進んでおり、これらも気候変動の影響と考えられています。名勝庭園においては樹木が老木化し、大雪やゲリラ豪雨などによる倒木が増えています。景観に変化を与えると同時に参拝者や建物に対して危険を与える恐れがあり、伐採を計画しています。植生や生態、気温湿度等の環境が熱帯化しており、文化財や名勝を取り巻く環境が変化しているスピードに対応が追い付いていないのが現状です。

長い歴史の中で栄枯盛衰を繰り返す、幾多の苦難を奇跡的に生き残った那谷寺は、2017年に開創1300年を迎えました。しかし昭和初期までは今の那谷寺からは想像できないくらい荒廃していました。前田家の祈祷寺であった那谷寺は、大聖寺藩の一部でした。明治維新後の廃藩置県によつて

那谷寺は抛り所を失い、明治から昭和初期にかけて那谷寺は大変困窮しました。地域において結成された那谷寺保存会の寄進によって何とか伽藍の維持をしてきました。先の大戦において那谷寺は日本海軍に接収され、若い兵士が分宿していました。その中には特攻部隊(神雷部隊)の兵士もいたと聞いています。先代住職の幼少期までは、朽ちかけたお堂に住み、爪に火を点すような生活をしながら寺を守り続けてきました。

戦後、第十五世隆禅によって那谷寺が旧国宝に指定され、日本の高度経済成長の波に乗った観光ブームにより、現在の姿に整備して行くことができた。那谷寺は檀家制度の上に維持されてきていないので、観光が主な収入源となりました。真言宗では「方便を究極と為す(他者を救うための実践を究極の目的とする)」ということが大切な教えとされています。当寺においては実践活動として地域の高齢者福祉、災害支援、温暖化対策や国際支援NGO活動などを行っています。これらの活動も寄付寄進によって成り立ってきました。しかしバブル崩壊以降、地方観光は疲弊し、コロナ禍以降は観光スタイルが大きく変化しました。インバウンド需要で沸き立つ都市部と対照的に沈下がり止まりません。人材や後継者不足もあり、後世に文化財と信仰を残していく難しさを痛感しています。

那谷寺は、山岳信仰・自然崇拜寺院であり、神も仏も一緒に共存し信仰されています。この寺院には多くの神々が混然一体となって存在しています。白山の神を本尊とし、自然の岩山を含む

自然そのものを信仰の対象としてきました。自然を神とし、山川草木すべてに神が宿するという原始的な信仰を守ってきました。明確な宗教信仰を持たない、または意識しない日本人の中にもその価値観は受け継がれ、自然との連続意識、一体感を受け継いでおり日本人の精神の根底に流れる原型がここに息づいています。この信仰は現在の環境問題や民族宗教間の対立、人間本位・経済本位の社会の在り方などに道筋をもたらすものではないでしょうか。

### 地域を繋ぐ

#### 「ハブ」としての

#### クラフトビール

#### コマップブルーイング

#### ビール醸造所

#### 山下 裕 (高49回)



高校を卒業して29年。まさか小松でクラフトビールを造ることになるとは、そして同窓会誌に寄稿することになるとは、人生はわからないものです。なんと約30年前の高校時代を思い出してみると、当時は明確なビジョンがあったわけでもなく、「パイロットに



なりたくない」という思いから防衛大学校へ進学しました。小学生の頃から繰り返し見ていた映画『トップガン』の影響や、近くに小松基地があって身近に感じていたからだと思います。

防衛大学校を卒業後、航空自衛隊でF-15戦闘機のパイロットとなり、平成16年から23年まで小松基地に配属になりました。それ以外は、人生の半分ほどを、北は北海道から南は沖縄まで全国を転動しながら過ごしました。

そんな中、ビール造りに出会ったのは、アメリカのネブラスカ州にある米軍基地に連絡官として赴任した時でした。周りに何もない土地柄だったこともあり、趣味として自宅でビール醸造(ホームブルーイング)を始めたのです(もちろん仕事外で)。アメリカのクラフトビール市場は巨大で、小さな街にも必ずブルワリーがあり、チーズケーキ味やピナツバター風味など、なんでもありの自由なビール文化に大変衝撃を受けるとともに、ビアパブが地域のコミュニティ的な役割を果たしていると感じました。

この赴任やこれまでの転勤を繰り返す中で、改めて小松を見ると、食べ物美味しく、地元を盛り上げる人を応援

する気風など、素晴らしいポテンシャルがあることに気づきました。「40代の内に小松を盛り上げる『何か』をしよう」と決意した私は、地域のストーリーを自由に組み込めるクラフトビールこそが、その最適なツールだと確信したのです。

令和6年8月に自衛隊を退職し、製造免許取得などの準備を開始。令和7年11月にKonatsu Brewing(「マップル」をオープンしました。クラフトビールとしては小松市初でしたので、僭越ながら小松を冠した名称を付けさせていただきました。

私は、コマップルが単に美味しいビールを「飲む」だけの場所とは思っていません。外からの視点で見ると、小松には「ものづくり」「歴史」「食」など圧倒的なポテンシャルがあり、空港、駅、インターチェンジがあつて非常に多くの人々が小松を通っています。そこでビールを単なる「飲むもの」ではなく、地域を繋ぐ「ハブ(繋ぎ役)」として機能させ、農家さんからの素材、職人さんの技術、史跡など場所の物語をビールという一つのプロダクトに繋ぎ合わせ、小松の魅力を再発見したいと思っています。

同窓会だより

## 高校24回卒 学年同窓会開催報告

幹事 吉田 廣也(高24回)

「今年で最後かしれんし、どうや出席してくれんけ、…」と、懐かしい声で電話があったのが8月初旬。以来待ちに待った同窓会の当日が来た。

〔日時〕 11月5日、17時開始

〔場所〕 ウレシヤス小松、こまつ北電ホール

〔参加〕 131名

新幹線で小松駅に降り立ち、10月23日に開業したばかりの北電ホールに着いたのが開会15分前、1階のエントランスに入ると2階からの熱気がむんむん大きな笑い声も響いてきた。受付に仲間も無く、「久しぶりやんな、なあも変わつとらんがいや」「名前聞いても思い出せんでごめん」等々、既に最高潮の盛り上がりだ。コロナの影響もあり5年前は見送り、10年ぶりとなった学年同窓会はスタート前からこんな具合だった。

受付でテーブル席のくじ引きを終えた頃、司会進行の松本君が「歓談が始まったら、写真で集まるのが難しくなるんでクラス毎の記念写真を先に撮ります」と声をあげた。しかし、なかなか集まる様子もなく、既にここかしこに小さなグループができていた。

ようやくクラス毎の写真撮影が一通り終わり、今日の参加状況の報告があった。幹事団皆様のご尽力により、今日の参加者が130名を超えたことが報

告された。一方、連絡が取れたものの内、残念ながら物故となられた方も33名あり、あの人が…、あの人も…とあつちこつから無念の聲が漏れていた。弔意を込めて黙とうを捧げた。

いよいよ乾杯。幹事団女子の面々がステージに進み、代表の田屋さんの発声で乾杯となった。乾杯の後は歓談と食事の時間です。ここでも、くじ引きの効果で卒業後久しく会ってなかった人との再会があったり、学生時代には話すことのなかった同期生との対話もあった。

正面左右のスクリーンにて映し出されたスライドでは、運動会・文化祭や修学旅行、クラブ活動などの懐かしいスナップも映し出されていた。(とは言え、ほとんどの人がテーブルを離れて思い思いの場所まで話に夢中、大変な盛り上がりだった。かく言う私も食べるのを忘れてテーブル廻りをして、せっかくの食事は堪能しそなつてしまった。残念！)

同窓会恒例の「校歌斉唱」では、久しぶりに声を張り上げ、西君の音頭で「万歳三唱」、西沢君の「お開きの言葉」と続き予定時間はあつという間にすぎてしまった。(この辺りは、酩酊状態の私はほとんど覚えていない。)二次会のお誘いもあり、何組かのグループが小松の街に繰り出した。中には3次会まで頑張ったという70歳超えを感じさせない猛者もいたとか。

幹事団から、「今年が最後の学年同窓会」とは聞いたものの、まだまだ元気な面々が次の5年後、喜寿を迎えるころにまたぞろ開催の機運が高まることを期待してしまふのは私だけだろうか、また会えることを願って開催記と致したい。

同窓会だより

## 高校41回卒 学年同窓会開催報告

常任理事 福島 礼子(高41回)

令和8年5月2日、41回生としては4回目となる小松高校同窓会が行われました。ゴールデンウィーク真っ只中ではありましたが同級生72名に3名の恩師をお迎えさせていただき、大変賑やかに開催することができました。

会場は昨年にオープンし、JR小松駅前の新たなランドマークとして注目を集めているウレシヤス小松ことこまつ北電ホール。

私たちの同窓会オープニングは同級生の活動紹介が恒例となっていますが、今回は北陸電力小松支店長(5月時点)を務める奥真司さんのウレシヤス小松紹介プレゼンにて幕を開けました。北前船をモチーフにした建物の特徴的な外観や、洗練された空間の中にも地元の素材が多数用いられていること、また施設完成に至るエピソードなども知ることができ大変興味深かったです。奥さんは同窓会開催にあたり、ホールとの交渉にも尽力してくれ、無事当日を迎えられたのは彼のおかげでもあります。

司会は、我々41回生の同窓会総合プロデュサー的存在でいつもきめ細かい準備や気配りが定評の野口和久さんと川畠嘉美さん。北國銀行代表取締役社長、米谷治彦さんによるさわやかな乾杯の発声の後は川畠さんはじめ同級生3名が所属している地元のゴスペルサークルJoy of Singingのコンサート音源をBGMに会は、賑やかに進行了しました。



会の後半ではクラスごとに登壇し、一人ずつマイクを取りました。それぞれの近況報告の他に学生時代の思い出話なども披露されました。聴いている方は、その度に皆机の上の卒業アルバムの写真と現在を見比べて驚いたり笑ったり。和やかに懐かしい時間を過ごすことができました。

また、ご参加の先生方からも私たちにお言葉を頂戴しました。当時の自由な校風もあり、私たちは時にはやんちゃをし先生を困らせたりしたこともあったようですが、先生もその時のことをよく憶えていてくださり、同じ思い出を共有させていただいていることが嬉しかったです。

会は全員での校歌斉唱でクライマックスに。肩を組み「ああ我々が母校小松高校」と声を揃えると、野球部が甲子園出場した時、体育祭…今と同じよう



に仲間と肩を組み、校歌を力いっぱい歌ったあの青春時代が熱くよみがえってきました。

その後は学年理事永田篤志さんの挨拶で締めくくられました。

4年後にはいよいよ還暦を迎える私たち(まさに光陰矢の如し)。次は小松同窓会の還暦学年行事ホームスクールカミングデーでの再会を予定しています。

私たち41回生の学年グループラインなどを通じて交流を続けていますが、最近では毎週のように活躍中の同級生の記事や写真などがアップされており、トークルームも賑やかです。同級生の活

躍を目にすると宝物を見つけたように嬉しく、明日への励みになると同時に、年齢的にも仕事で充実し多忙な時期であることを実感します。

4年後にも何より健康で、そして良い笑顔で再会できるよう、それぞれの場所で一日一日を大切に頑張りがながら、これまで以上に仲間同士の絆や母校への想いも深めていきたいと思っています。

最後になりましたが、ご参加いただいた皆様、そして開催にあたりご尽力いただいた関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

同窓会日より

## 高校76回卒

### 学年同窓会開催報告

報告者 鵜川 優吾 (高76回)

76期同窓会は、多くの先生方と同級生が再び集い、高校時代の思い出を共有する大変温かい会となりました。本会の実行委員長は、私、鵜川と太田の2名で務めさせていただきました。高校3年時にクラス会長を務めていた流れからお声がけをいただき、太田とともにこの大役を引き受けることになりました。実行委員は各クラスから1名ずつの計8名で構成され、役割分担をしながら準備を進めていきました。

会場や運営方法については、前年の実行委員長であった北野さんや先輩方に連絡を取り、過去の事例や注意点を教えていただきながら決定していきました。しかし、実行委員長の二人ともが県外に住んでいたため、直接会場に足を運んだり対面で打ち合わせをしたりする

ことが難しく、オンラインでの連絡や調整が中心となりました。この点が準備の中で最も苦労した部分でしたが、委員全員の協力により少しずつ形にしていけることができました。

参加者の募集については、各クラスの実行委員を通じてクラスLINEに案内を流し、出欠を取りました。ただ連絡を回すだけでなく、久しぶりの再会が楽しみにするような文章を意識して招待状を作成し、できるだけ多くの人に来てもらえるよう工夫しました。

当日のプログラムは、私たちを3年間見守ってくださった酒匂先生による開会の挨拶から始まりました。また、乾杯の前には、1・2年次に学年主任として私たちを支え、導いてくださった故・吉田洋先生を偲び、全員で黙祷を捧げました。その後は歓談、写真撮影、ビンゴ大会、私たちにたくさんさんの学びを与えてくださった松島先生による閉会の挨拶という流れで進行しました。

受付は混雑を避けるため、開会の1時間前から可能とし、スムーズに入場できるようにしました。集合写真の撮影では、参加者全員が一枚に収めることが難しく、アパホテルのスタッフの方にもご協力いただきながら何とか無事に撮影することができました。

会の中では、ビンゴ大会や、事前に集めた高校時代の写真の上映、そして担任の先生方をお招きしての思い出話などを行い、参加者全員が高校時代に帰ったような時間を過ごすことができました。と思います。先生方からは「卒業後もこうして教え子と関われるのが嬉しい」という言葉をいただいたことがうれしく、また生徒たちも、2年の月日を経て変化し

た同級生たちとの再会を心から楽しんでいる様子でした。

無事に会を終えたときは、大きな達成感と安堵の気持ちでいっぱいでした。県外からの運営という難しさはありましたが、多くの人に「楽しかった」「またやってほしい」と言ってもらえたことが、実行委員長として何よりの喜びでした。今回の経験を通して、人と人をつなぐ場をつくることの大切さを改めて実感しました。また機会があればぜひ開催したいと思うような素敵な会になったと思います。



## 令和7年度 小松同窓会新年会レポート

副会長 高橋 達也 (高53回)

令和8年1月24日(土)、竣工したばかりの新施設ウレシヤス小松(こまつ北電ホール)にて、令和7年度小松同窓会新年会が開催され、約330名の同窓生が一堂に会しました。小松市にゆかりのある資材が随所に用いられた温かみのある会場は、参加者からも好評でした。受付開始直後から多くの同窓生が訪れ、再会を喜び合う笑顔があふれる中午後6時より開会となりました。



はじめに和田学会長より開会の挨拶があり、続いて馬場智子校長先生、富山小松同窓会会長であり北陸電力株式会社代表取締役社長でもある松田光司様よりご祝辞を頂戴しました。それぞれのお言葉からは、小松高校の伝統を大切にしながら未来へつなげていこうという強い思いが感じられ、参加者一同、改めて母校への誇りを胸に刻むひとときとなりました。

また、現キックボクシング DEEP フライ級王者として第一線で活躍されている村元友太郎さん(高校65回)からは、自身の歩みや挑戦の日々について語られ、努力を重ねることの大切さや目標を持ち続ける意義について、力



強いメッセージが贈られました。若い世代のみならず多くの同窓生の心に響く内容で、会場は大きな拍手に包まれました。

続いてPTA会長による学校現況報告、来賓紹介が行われた後、佐々木紀衆議院議員のご発声により乾杯。歓談の時間には、久しぶりに再会した旧友同士が近況を語り合う姿や、恩師を囲んで思い出話に花を咲かせる光景が随所に見られ、世代を越えた交流の輪が自然と広がっていました。

後半には幹事学年の引き継ぎが行われ、高校50回生から51回生へとバトンが渡されました。会の締めくくりには校歌斉唱、万歳三唱が行われ、名残惜しさを感じつつも、次回への期待を胸に閉会となりました。

世代を越えてつながる同窓の力を改めて実感した本年の新年会。今後この絆を大切に育みながら、小松高校同窓会のさらなる発展を心より願っております。

### 同窓会支援制度

対象 ● 20歳代同窓会会員  
金額 ● 1回2万円  
支援回数 ● 2回上限  
報告 ● 支援制度報告書にて  
写真・内容報告いただき  
天守台編集委員会に報告

#### 1、設立の趣旨

若年層の同窓生の同窓会への参画意識を少しでも高めるために、経済的に余裕がなく、援助を必要とすると思われる、20歳代の学年別同窓会開催時について小松同窓会から支援をする。

#### 2、制度の概要

- ① 開催補助金の支援年齢条件  
卒業後 20歳代までの同期同窓会について、2回を上限として1回につき、2万円を支援する。
- ② 開催補助金支出の条件  
・ 学年全体の同期同窓会であること  
・ 参加予定対象者数が50名以上であること  
・ 代表申請者が、学年常任理事であること  
・ 「小松同窓会 同期会支援事前申請書」と事後の「小松同窓会 同期会開催報告書」を事務局に提出すること

### 小松同窓会入会式 第6回小松同窓会青雲賞贈呈式 常任理事任命式

● 日時  
令和8年3月3日(火)9時～9時20分  
● 出席  
和田 学会長、田上好裕 副会長、  
江口 充副会長、  
● 青雲賞受賞者  
小野地花佳31H、岩田弦希36H、  
榊駿之介38H

## 小松同窓会 記念館特別展

## 安田 淳 (高校31回卒) 展

「画家／やすだじゅん &  
美術教師／やすたあつし」

記念館委員会では、本年度の小松同窓会記念館特別展として、安田 淳 (高校31回卒) 展「画家／やすだじゅん & 美術教師／やすたあつし」を開催します。

安田 淳氏は、金沢美術工芸大学在学中から、陽展や現代美術展などに出品し、卒業後は、陽会、日仏現代国際美術展などの公募展やコンクールなどに出品し、地元小松では、小松美術作家協会や小松青年美術会／玄の会などの展覧会で作品を発表しました。

## 小松同窓会 記念館特別展 安田 淳 (高校31回卒) 展

～画家／やすだじゅん & 美術教師／やすたあつし～



- 会場：小松高校 記念館特別収蔵庫 校舎ギャラリー
- 会 期：令和8年10月11日(日)～11月7日(土)
- 開館時間：10:00～15:00
- 休 館 日：日・祝日 ※10月11日(日) 開館

オープニングセレモニー  
10月11日(日) 11:00～  
記念館前

文化庁インターンシップ研修員(平成3年度)の後、文化庁現代美術選抜展や石川県作家選抜美術展に招待出品し、美浜美術展【大賞】・伊丹市立美術ギャラリー伊丹大賞展【大賞】・目黒雅叙園アートブライズ【細川力蔵賞】を受賞され、東京銀座「シロタ画廊」などで、個展を開催してきました。国際アートフェア「日本美術の輸出」展では、ベルギー・ゲント市やイタリア・ミラノ市、アメリカ・ニューヨーク市などの会場に作品を展示されました。

本展覧会では、中学校・高校での美術の授業作品、金沢美術工芸大学で制作した作品、「画家／やすだじゅん」としての、20代の写実作品「ヴェイカン・シリーズ」、「とうもろこし」をモチーフとして虚像と実像を描いた20代後半から30代の「夏夢(なつゆめ)」シリーズ、40歳から25年余り追求し続けている抽象表現「もうひとつの現実」シリーズを展示します。「美術教師／やすたあつし」では、金沢辰巳丘高校芸術コース美術専攻や工業高校デザイン科で指導した生徒作品、高校での授業や石川県教育センターの指導主事として研修講座で活用した教材など、ホーム担任や学年主任としてのホームルーム通信など、生徒たちから贈られた色紙や記念品などを展示し、著作した高校芸術科美術Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの教科書や協力者として執筆した高等学校学習指導要領・同解説を紹介し、金沢美術工芸大学卒業後から41年間の石川県公立高校の教員としての足跡を展覧します。

在校生には、安田氏の「画家」として、「美術教師」としての『あゆみ』から、生き方・あり方への向き合い方について感じ取ったり読み取ったりして、自分の可能性を信じて高みを目指す一助にもらえることと思います。同窓生の皆様には、是非ご来校いただき、記念館特別展「安田 淳展」をご高覧ください。また、ご案内を申し上げます。

文責／記念館委員会副委員長

安田 淳(高31回)

● 78 回常任理事

大村悠斗 31H、金子 稜 33H

卒業式に先立ち、卒業生307名の小松同窓会入会式が行われ、田上好裕副会長が登壇し、78 回常任理事委嘱状授与、「小松同窓会青雲賞」表彰状、記念品を贈呈しました。

小松同窓会青雲賞

● 表彰対象

卒業予定者のうち、次のいずれかに該当する生徒の中から2名程度を選考。

- ① 校是である「文武両道」を実現し、学校生活全般にわたり他の模範となった生徒
- ② 部や生徒会の発展に顕著な成果を挙げ、学校の活性化に多大な貢献をした生徒
- ③ ボランティアなど社会活動で顕著な活動実績を残した生徒
- ④ その他、特筆すべき成果を挙げ、表彰に値すると認められる生徒

● 表彰者(3名)

● 31H 小野地花佳(おのちはるか)

● 36H 岩田 弦希(いわただけんき)

● 38H 榊 駿之介(さかきしゅんのすけ)



## 進路指導課より

伝統と革新で挑む小松高校の進路指導  
「小松メソッド20」

小松高校は、文部科学省より2026年度から「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」先進型改革期(1期)に指定されました。「自ら課題を発見し、粘り強く探究し続ける科学技術人材育成システムの構築と普及」を研究開発課題に掲げ、社会の変化に対応して自ら問いを立て、科学的手法で検証し、課題解決に向けて粘り強く取り組み、社会に貢献できる人材の育成を目指しています。

この新たなステージを支えるべく、進路指導課では「君たちの本気を応援する」をスローガンに掲げ、生徒の支援を行っています。大学入試の大きな変化に柔軟に対応する組織的な進路指導体系「小松メソッド20」を本格的に稼働させ、伝統的進学校としての良質な教育による「確かな学力」の定着と、時代を拓く革新的な教育システムの推進による「学びに向かう力」の育成を両立させています。対面指導と生成AIを有機的にハイブリッドさせた新しい指導法の開発も進めております。また、本校卒業生の皆様による在校生への関わりを強化する「キャリアエール」として、各種講演会や講話、寄稿を頂戴しており、生徒たちは身近で憧れるロールモデルとして大きな刺激と心強い励みを受けています。

教科「情報Ⅰ」が加わった新大学入学共通テストへの対応においては、各教科・科目のバランスに配慮した緻密な演習計画を策定しました。学年団や教科と連携し、学習効果を最大化する補習等の実施に加え、マーク式対策と個別学力検査(2次試験)の記述対策との両立を図りました。この組織的な取り組みの結果、生徒たちは秋から本番にかけて目覚ましい学力の伸びを見せ、新共通テストへも見事に対応しました。今春の入試では、難関10大学への合格者数が令和以降最多となったほか、国公立大学・私立大学ともに合格者数を大きく伸ばす結果となりました。

時代が移り変わり、大学入試がどれだけ変化しようとも、本校が目指すのは、高い志を胸に、自分の足で立ち、社会に貢献できる人材を育成し続けることです。伝統と革新を掛け合わせ、進化し続ける伝統的進学校でありたいと考えております。新体制となった今年度も「小松メソッド20」をさらに深化させ、生徒一人ひとりが高い志を抱き、第一志望を実現できるように全教職員が一丸とひとつで全力で伴走してまいります。在校生への温かい眼差しと「キャリア・エール」をはじめとする多大なるご支援に、心より感謝申し上げます。今後とも、次代を拓く小松高校生たちの挑戦を力強く後押ししていただけますよう、変わらぬご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

## 最近3か年の大学合格者数 (浪人生を含む)

| 大学名      | R8 | R7 | R6 | 大学名     | R8  | R7  | R6  | 大学名    | R8  | R7  | R6  |
|----------|----|----|----|---------|-----|-----|-----|--------|-----|-----|-----|
| 北海道大学    | 13 | 8  | 4  | 横浜国立大学  | 1   | 0   | 1   | 青山学院大学 | 9   | 0   | 5   |
| 東北大学     | 10 | 4  | 5  | 新潟大学    | 1   | 2   | 0   | 慶応義塾大学 | 3   | 3   | 7   |
| 東京大学     | 3  | 1  | 2  | 富山大学    | 11  | 18  | 18  | 上智大学   | 5   | 7   | 1   |
| 東京科学大学   | 1  | 2  | 1  | 金沢大学    | 55  | 64  | 75  | 中央大学   | 7   | 2   | 1   |
| 一橋大学     | 0  | 2  | 1  | 福井大学    | 8   | 11  | 9   | 東京理科大学 | 15  | 3   | 2   |
| 名古屋大学    | 6  | 4  | 9  | 信州大学    | 5   | 8   | 4   | 法政大学   | 12  | 10  | 2   |
| 京都大学     | 3  | 3  | 4  | 静岡大学    | 7   | 2   | 3   | 明治大学   | 18  | 15  | 8   |
| 大阪大学     | 9  | 17 | 11 | 名古屋工業大学 | 7   | 5   | 2   | 立教大学   | 3   | 8   | 6   |
| 神戸大学     | 10 | 8  | 7  | 奈良女子大学  | 2   | 1   | 3   | 早稲田大学  | 16  | 3   | 11  |
| 九州大学     | 4  | 3  | 3  | 岡山大学    | 4   | 2   | 0   | 同志社大学  | 45  | 36  | 31  |
| 10大学合計   | 59 | 52 | 47 | 広島大学    | 7   | 5   | 2   | 立命館大学  | 100 | 73  | 84  |
| 国立大学医学科  | 5  | 8  | 3  | 大阪公立大学  | 8   | 3   | 8   | 関西大学   | 16  | 18  | 16  |
| 筑波大学     | 0  | 0  | 2  | 石川県立大学  | 3   | 2   | 3   | 関西学院大学 | 29  | 16  | 19  |
| 千葉大学     | 1  | 7  | 7  | 公立小松大学  | 3   | 1   | 4   |        |     |     |     |
| 東京外国語大学  | 0  | 2  | 1  | 国公立大学合計 | 231 | 227 | 227 | 私立大学合計 | 612 | 553 | 505 |
| お茶の水女子大学 | 2  | 0  | 2  |         |     |     |     |        |     |     |     |

## 編集室だより

天守台71号は経済学者の若杉さん、松尾さんで始まり、那谷寺住職の木崎さん、ビール醸造家の山下さん。本当に毎回多士済々の松高卒業生記に感服いたしております。今後の更なるご活躍、ご祈願を申し上げます。

また同窓会新年総会、24回41回76回各学年の同窓会活動報告、画家安田さんの記念館特別展案内と大学合格者一覧を掲載していますご高覧下さい。

これからも「天守台」宜しくお願い致します。(東)

同窓会LINEコード



【同窓会本部】TEL:0761-21-6330

メール:komatsudousoukai@gmail.com

ご住所の変更などございましたら、事務局までご連絡いただけますよう、よろしくお願いいたします。

学校職員

委員長  
副委員長  
委員

「天守台」編集委員会

|        |        |        |        |        |        |        |        |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 村戸     | 川崎     | 橋本     | 辻      | 宮浦     | 前田     | 細川     | 東      |
| 徹      | 創      | 幸      | 克      | 誠      | 弥      | 千      | 次      |
| (高33回) | (高43回) | (高48回) | (高45回) | (高33回) | (高26回) | (高35回) | (高22回) |